伊豆諸島におけるケンサキイカの生態について
～調査と操業日誌からみた成長・成熟と分布特性～

伊豆諸島におけるケンサキイカの資源生態を把握するため、漁業調査指導船によるイカ釣り調査および電子操業日誌（トリトンの矛）のデータの整理を行いました。調査の結果、漁獲は主に春季に多く、成熟個体が主体でした。外套長組成からは複数の季節群の存在が示唆され、CPUEは水温・塩分などの海洋環境条件と関連して変動する傾向が認められました。

実施機関	大島事業所	事業名	漁業調査指導

背景・ねらい

ケンサキイカは伊豆諸島北部海域においてイカ釣り漁業の重要な対象種ですが、近年は水揚げ量が減少傾向にあります。しかし、本海域において資源生態学的知見は非常に乏しいのが現状です。本研究では、効率的なイカ釣り漁業を行うために、基礎的な資源生態学的知見の蓄積を目的として、漁業調査指導船「みやこ」、「やしお」にて毎月１回以上、イカ釣り調査を実施しました。また、電子操業日誌のデータの整理も行い、情報を収集しました。

成果の内容・特徴

①　月別釣獲数・水揚量

イカ釣り調査では主に 3－6 月に釣獲、電子操業日誌のデータでは主に 4－6 月に漁獲がみられました（図 1）。

②　成長と成熟

調査にて釣獲されたケンサキイカの外套長は平均 263mm でした。最大はオスで 471mm、メスで 340mm となり、全体としてオスの方が大型となりました。メスは季節が進んでも外套長組成に大きな変化はみられなかったのに対し、オスは小型化する傾向がみられました。また、オスは 2 峰型を示すようにもみえ、複数の季節群の存在が示唆されました（図 2）。電子操業日誌のデータを用いて、新島及び神津島の月別銘柄組成を解析した結果、いずれにおいても小型化する傾向が認められました。また、GSI（生殖腺重量 / 体重× 100）の解析結果からは、各月とも成熟個体が多く釣獲されていました。メスは 2－4 月にかけて増加し、5 月からは減少傾向となり、オスは 2－6 月にかけて緩やかに増加し、7 月に急激に低下しました（図 3、4）。

③　環境条件と CPUE

CPUE（釣獲数 / 竿 / 時間）と各環境条件の関係については、表層水温は約 17－23℃、底層水温は約 13－19℃程度、塩分は 34.60－34.65‰の場合に高い CPUE となりました。

釣獲水深は、昼間は 100－140m、夜間は 40－60m で多く釣獲されました。また、昼間の場合は 2 月から 7 月にかけて徐々に深くなる傾向がみられました。これは表層水温の上昇に伴いケンサキイカの生息に適した水温帯が深くなるためと考えられ、ケンサキイカは環境条件に応じて分布水深を変化させている可能性が示されました。

成果の活用と反映

本調査の結果、伊豆諸島北部におけるケンサキイカは主に春季に漁獲が多く、成熟個体が主体であることが明らかになりました。外套長組成からは複数の季節群の存在が示唆され、CPUE は水温や塩分など海洋環境条件と関連して変動する傾向がみられました。今後も調査を継続しデータを蓄積することで、生態や漁場形成要因の解明を目指します。

（宮城　真鈴）

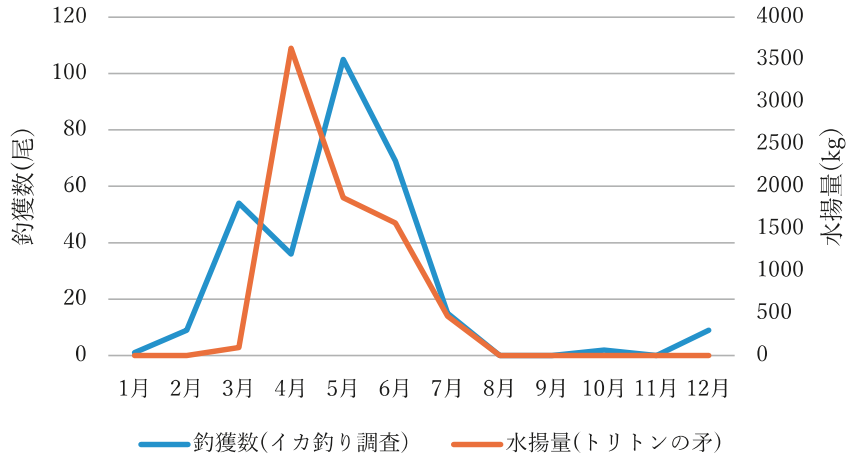


図 1　月別釣獲数・水揚量

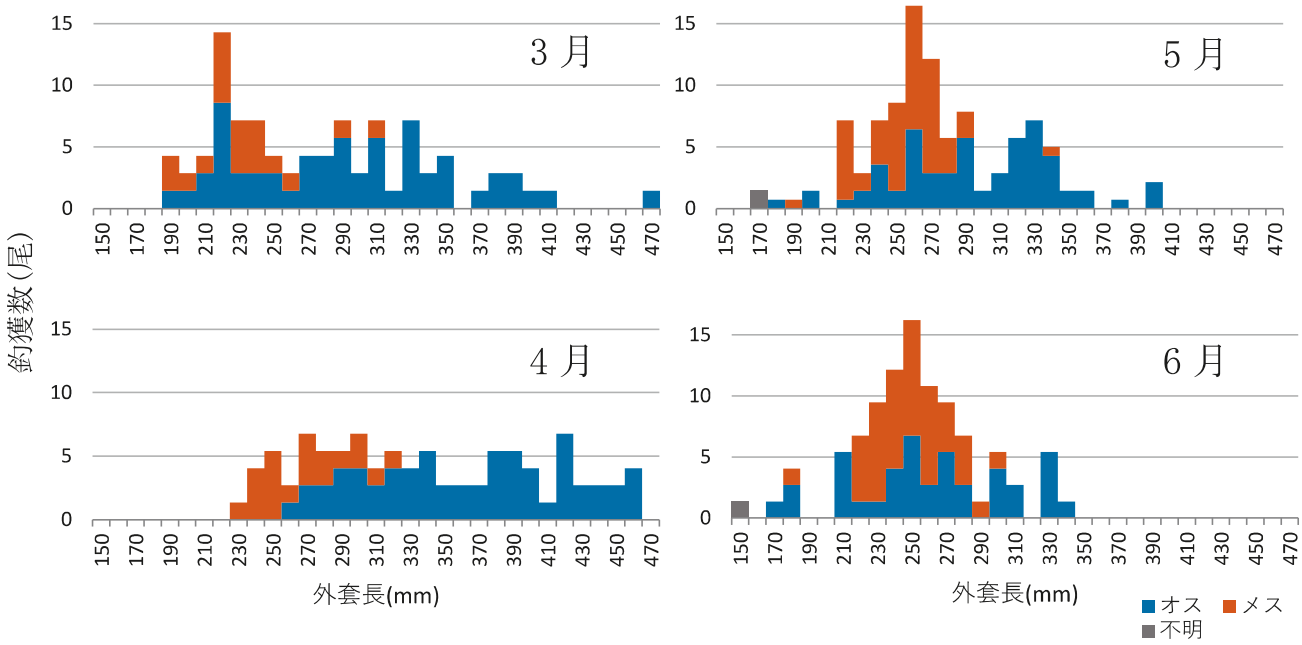


図 2　月別外套長組成（イカ釣り調査）

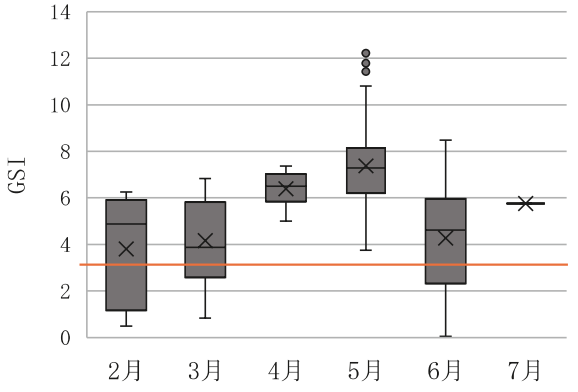


図 3　雌の GSI の季節変化
（オレンジ線：ケンサキイカの雌雄別成熟基準）

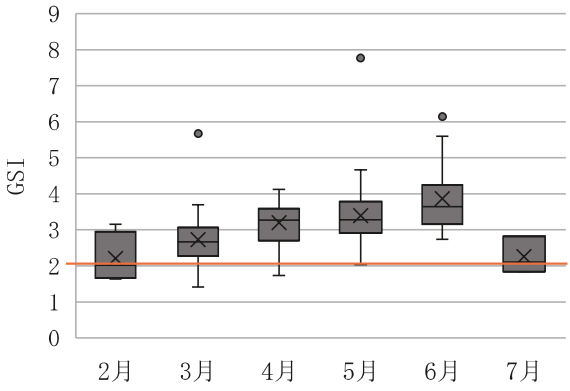


図 4　雄の GSI の季節変化
（オレンジ線：ケンサキイカの雌雄別成熟基準）